

千葉本大鏡における漢字の振りがな及び声点について

附『年号読方考証稿』鶏肋

千葉本大鏡は、三分の一に過ぎぬ零本であるが、「大鏡の写本
中、最古のものであ」り、「大鏡の原本に最も近いもの」である。
奥書がないため、確かな書写年次は不明といわざるを得ない。し
かしながら、本文の筆致は典雅な平安時代後期の趣を残している。
〔遅くとも十二世紀末の書写であることは確実であろう〕と思われ
る。千葉本大鏡には、同筆で、行間に傍注があり、また、振りが
な、声点が多用されている。そこで、ここでは、千葉本大鏡におけ
る漢字の振りがな及び声点の実態を報告し、国語史研究資料の一助
にしたい。

底本としては、『^{天理}圖書院 善本叢書大鏡諸本集』中の千葉本大鏡を使
用した。

二

千葉本大鏡における漢字の振りがな、ルビの附してある漢字、及
び声点の表記には、不統一な表現が目立つ。

1 振りがな表記の不統一なるもの。

① 御イエ〔御家〕 8ウ5

〔8ウ1とあるのは、底本の8丁裏5行目の所在を示し、傍
とあれば傍注のことである。傍線筆者。以下同〕

イヘ〔家〕 21ウ1

② 御オノココ〔御男子〕 10オ1

御ヲノココ〔御男子〕 37ウ2

③ 御シヤシ〔御障子〕 35ウ1

御シヤウシ〔御障子〕 42ウ3

④ 〔平仮名はルビのない漢字を示す。以下同〕

御ナオシ〔御直衣〕 40オ8

御ナヲシ〔御直衣〕 98ウ4

オホチ〔祖父〕 9ウ8・103ウ8・114オ3

ヲホチ〔祖父〕 40オ5

⑤ サウシキ〔雑色〕 127オ6

サフシキ〔雑色〕 41ウ5

⑥ しやうシユ〔上手〕 33オ2

しやうス〔上手〕 51オ6

⑦ シム|テン〔寝殿〕 39オ4

⑧ シン|テン〔寝殿〕 38ウ5

⑨ シユム|さんくう〔准三宮〕 3オ5

⑩ シユン|さんく〔准三宮〕 9ウ7

⑪ セイシム|こう〔清慎公〕 31オ6傍

⑫ セイシン|コウ〔清慎公〕 31ウ3

⑬ テイシム|こう〔貞信公〕 29ウ2

⑭ テイシン|こう〔貞信公〕 10オ6

⑮ トイ|コク〔刀夷国〕 125ウ2

⑯ トキ|コク〔刀夷国〕 123オ6

⑰ レイ|セン|キン〔冷泉院〕 50オ1

⑱ レ|セイ|〔冷泉〕 55オ3

⑲ レム|セイ|るん〔冷泉院〕 81オ3

⑳ 振りがなの附してある漢字の不統一なるもの。

㉑ ムライ〔无礼〕 41オ4傍

㉒ ムライ〔无礼〕 132ウ8

㉓ 声点の不統一なるもの。

㉔ ① しやうス〔上手〕 20オ3

② しやうス〔上手〕 51オ6

③ シユム|さんくう〔准三宮〕 3オ5

④ シユン|さんく〔准三宮〕 9ウ7

⑤ シユン|さんく〔准三宮〕 9ウ7

三

次に、ルビの附してある漢字で、誤字と思われる例が見えるので

例示する。

① クワ|コン〔訛言〕 45オ4傍

② セン|エウ|テン〔宣曜殿〕 48ウ1

③ せん|えう|てん〔宣曜殿〕 54ウ5

④ ファイ〔無哀〕 77ウ1

⑤ ①は「過言」、②は「宣曜殿」、③は「無愛」、④は「文刺」である。

四

千葉本大鏡には、漢字に二様のよみを附したものがあつた。次の十例である。

① 諡号 3オ2

② 親王 6ウ8

③ 一栄 13ウ1

④ 御衣 15ウ7

⑤ 住 19オ1

⑥ 懐平 36ウ3

⑦ 冷泉院 55オ3

⑧ 道雅 111オ3

⑨ 竜胆 122オ1

⑩ 時平 10オ2・40ウ4

五

次に、千葉本大鏡の傍訓のかなづかいを、一般に定家かなづかいといわれている、南北朝時代の行阿の『仮名文字遣』と比較してみる。上段が『仮名文字遣』で、下段が千葉本大鏡のルビである。

1 『仮名文字遣』と、千葉本大鏡の傍訓のかなづかいとが一致していると思われるもの。

① なをし

ナヲシ〔直衣〕127オ1

② (傍線は『仮名文字遣』における所在の項を示す。以下同)

③ こをけ

コヲケ〔小桶〕21ウ8

④ おほよそ

オホヨソ〔凡〕29オ8・35オ3

⑤ おつ

オツ〔落ツ〕13ウ1

⑥ つえ

ツエ〔杖〕127ウ3

⑦ ぬほしえは共

御エホシ〔御鳥帽子〕126ウ8

⑧ ひとへきぬ

ヒトヘキヌ〔単衣〕121ウ7

⑨ まへ

おマヘ〔お前〕12ウ1・51ウ4

⑩ さかへ

サカヘ〔栄へ〕13ウ1

⑪ まとひて

マトヒテ〔迷ヒて〕30ウ4

⑫ こよひ

コヨヒ〔今夜〕16オ2

⑬ いし

イシ〔石〕127ウ2

⑭ にしのたい

にしノタイ〔西対〕82オ2

⑮ ものいみ

御ものイミ〔御物忌〕8ウ8

⑯ いふ

イフ〔言フ〕55オ3傍

⑰ 御すいしん

御スイシン〔御隨身〕24オ7

⑱ いみな

イミナ〔謚号〕3オ2

⑲ いうしよく

イウシヨク〔有識〕31ウ5

⑳ いもうと

イウシヨク〔有識〕43オ4

㉑ くらゐ

御イモウト〔御妹〕36ウ5

㉒ おほち

クラキ〔位〕45ウ7

㉓ おほち

オホチ〔大路〕9ウ3

㉔ しやうし

御シヤウシ〔御障子〕42ウ3

㉕ したうつ

御シタウツ〔御襖〕91ウ5・92オ1

㉖ けう

ケウ〔希有〕14ウ7・137オ8

㉗ せうそく

御セウソク〔御消息〕56オ5

㉘ そうす

ソウス〔奏す〕42ウ4

㉙ まうす

マウス〔申ス〕27オ6傍

㉚ てうし

テウシ〔調子〕134オ7

2 『仮名文字遣』と、千葉本大鏡の傍訓のかなづかいとが一致し

ていないものを含み、統一を欠いていると思われるもの。

① なをし

御ナオシ〔御直衣〕42オ8

② おほち

御ナヲシ〔御直衣〕98ウ4

③ おほち

オホチ〔祖父〕9ウ8・103ウ8・114オ3

④ おほち

ヲホチ〔祖父〕40オ5

⑤ いへ

御イエ〔御家〕8ウ5

⑥ いへ

イヘ〔家〕21ウ1

3 『仮名文字遣』と、千葉本大鏡のかなづかいとが異っていると

思われるもの。

① せうよう

セウエウ〔逍遙〕46ウ6

② こゑ

コエ〔音〕30ウ8

③ にゑとも

ニエ〔贅〕51ウ4

④ すまひすまふ共

スマイ〔相撲〕81ウ5

⑤ ことわさ

御コトハサ〔御諺〕27ウ6傍

⑥ たまふ

タマウ〔給ウ〕48オ5

⑦ たまふ

タマウ〔給ウ〕48オ5

⑧ たまふ

タマウ〔給ウ〕48オ5

⑨ たまふ

タマウ〔給ウ〕48オ5

⑩ たまふ

タマウ〔給ウ〕48オ5

以上、若干『仮名文字遣』と異なるものや、かなづかいの不統一なる例が散見されるが、千葉本大鏡の傍訓のかなづかいの性格は、いわゆる定家かなづかいに近似しているといえるようである。

六

千葉本大鏡の漢語のルビには、平安時代の和文特有のよみと思われるものと、それとはやや異なると思われるものとが見られるようである。主要な語を例示する。

1 和文特有のよみと思われるもの。

① ケウ〔興〕 35 オ 1

② スケ〔出家〕 10 ウ 8 傍

2 和文特有のよみとは、やや異なると思われるもの。

① カンタチヘ〔神達部〕 9 オ 6・35 ウ 5

② コウクキテン〔弘徽殿〕 36 ウ 7

③ シンクケイシヤ〔淑景舎〕 100 ウ 5

④ シユキヤウ〔誦經〕 49 ウ 5

⑤ しやうシユ〔上手〕 33 オ 2

その他、留意すべき傍訓及び声点を持つ語に、次のごときものがある。

① カウスシ〔神主〕 96 オ 6

② キヤウヨウ〔饗応〕 102 オ 4・114 オ 6

③ コンヘンタウ〔権別当〕 22 ウ 8

④ シフキヤウ〔執行〕 31 ウ 1

⑤ セウ〔詔〕 11 オ 4 傍

⑥ チキヤウシヤ〔持経者〕 39 ウ 7

⑦ ていしんこう〔貞信公〕 27 オ 4 傍

⑧ ニヨハウ〔女房〕 69 オ 6

① ねんシヤク〔年爵〕 2 ウ 8

② ハイセン〔陪膳〕 7 オ 4

③ ヒシヤウ〔非常〕 42 オ 3

④ もんとくてんわう〔文德天皇〕 3 オ 4

なお、干支のよみで注意せられるものがある。

① ツチノトノヒツシ〔己未〕 50 ウ 8

② ミツノトノキ〔癸亥〕 18 ウ 2

の二例である。『日本国語大辞典』などは、何れも、「つちのとーひつじ」「みずのとーい」とし、「ノ」を欠いて記す。

七

ここでは、注意すべき一、三の語について触れる。

1 オンソ〔御衣〕

「御」は、「オホン・オン・オ・ミ・ゴ・ギョ」などとよまれるが、貞治年間（一三六四頃）になる『河海抄』の第一に、

御をはいづくにてもおゝむとよむへし日本紀以下の読様也

とあるように、平安時代においては、「御」のよみには通常「オン」はなく、「オホン」であったようである。この事については、すでに諸氏によってほぼ明らかにされたところである。

千葉本大鏡には、左のごとき「オン」と傍訓のある用例が「オンソ」〔御衣〕（15ウ7）の形で一例見える。このルビ以外仮名書きで、「オン」と書かれている使用例は見られない。東松本大鏡なども、すべて「おほん」で、「おほんかた」〔御肩〕〔普物語〕「おほんかたち」〔伊尹〕「おほんことも」〔道長〕のごとく「おほん」とある。

「オン」の仮名書きの例としては、天仁三年（一一一〇）成立の『法華百座聞書抄』に

王ノヲムトモノ人

オ 500

聖靈ノヲムタメニ廻向シマウサセタマウ。

ウ 134

太子ノヲムマヘニマイリテ、

ウ 151

ヲムカサイヒル事ヲエタリ

ウ 184

と見えるのが早い用例であろう。千葉本大鏡の「オンソ」の傍訓については、すでに榊原邦彦氏のご指摘がある。「後代^{注24}の読みが混入したものであろう」とされた考察は、妥当な見解と思われる。

2 コセン〔御前〕とおまへ〔御前〕

千葉本大鏡中に、「コセン」〔御前〕の用例が二例

御ありきのおりはおほろけにて御前つかひたまはす

21 ウ 3

よにいりぬれは御前の松のひかりにとをりてみゆるに

96 ウ 4

「おまへ」〔御前〕の使用例が二例

御前の梅の花を御覧して

12 ウ 1

御前の庭にとりをかせ給て

51 ウ 4

見える。この両者の意義の相違について、現行の諸辞書などの解説は、きわめてあいまいである。しかしながら、用例が明示しているごとく、「コセン」〔御前〕は二例とも、御前駆の意味で使用され、「おまへ」〔御前〕は共に、前の尊称に用いられている。そこには判然とした区別がある。「御前」の「御」を、「お」とよんだのは「おまへ」と仮名書きで表記され、前の敬称で使用されている例が、東松本大鏡に

道俗男女のおまへにて申さんとおもふか

序

御簾のうちにおはしまして御覧せしおまへとほりしなむ

師輔

まいらしおまへのきたなきにとつふやきたまへは

公季

おまへのものともまいらせすへたりけるを

昔物語

などのごとく存するからである。なお、大鏡（東松本）には、「おまへ」の意義で、

ちはやふる神のみまへのたちはなもゝろきもともにをひにけるかな

昔物語

のような「みまへ」の使用例が見える。和歌の例である。平安時代においては、歌の世界では、通常「みまへ」で「おまへ」を避けたようである。

榊原邦彦氏は「中古仮名作品における『御前』について」なる論

致で、『源氏物語大成校異篇』の底本、書陵部蔵青表紙本、室町時代写の伝伏見宮貞敦親王等寄合書の蓬左文庫蔵青表紙本、天正年間写の里村紹巴等寄合書の蓬左文庫蔵青表紙本、高松宮蔵河内本、尾州家河内本の用例を調査され、

（一）前駆の意の場合は「こそん」。

表記は「御せん、こそん、御前」など。

（二）前駆以外の場合（貴人の前や、貴人などを言ふ場合）は「おまへ」

表記は「おまへ、御まへ、御前」など。

と両者が明確に区別されていたと報告されている。千葉本大鏡のルビからも、千葉本系大鏡の諸本からも帰納せられることで、推測の確かさが感得される。

3 莫^レ

築島裕博士は、^{注29}「形容詞の命令形は、仮名の日記物語には用例が見えず、『無し』の命令形『なかれ』が、訓読語に用いられるのがその唯一の語例である」とされ、

^{注30}既に心に称ひ已ば、常に持して忘（る）ルこと莫^レ（既称心已

常持莫忘）^{（二）}（三）（二）金光明最勝王經八五八

慎（ミ）て喪を送ルこと母カレ（慎母送喪）

^{（一〇）}（二）史記呂后本紀九オ一

の例を挙げておられる。そして、『すべて『……コトナカレ』と『コト』を受けて訓じた。現在の漢文の訓法では一般に、

天句踐ヲ空シウスルナカレ

のやうにコトを入れないでよむが、このよみ方は、後世の新しい訓法である」とされる。千葉本大鏡に、孤例ではあるが道真の詩の訓読に「……コト莫^レ」の用例がある。左に掲げる。

駅長^{チキョウ} 莫^レ 驚^{オドロ}

13ウ1

八

以上、千葉本大鏡における漢字の振りがな及び声点について整理してみた。実態調査が主な目的であるため、特に結論というほどのものはないが、大略次のことが言えるかと思う。

一 漢字の振りがな、ルビの附してある漢字及び声点の表記には、不統一な表現が目立つということ。

二 ルビの附してある漢字に、誤字と思われるものが数例見えるということ。

三 同一漢字に、二様のよみが散見されるということ。

四 傍訓のかなづかいは、定家のかなづかに近似しているということ。

五 漢語のルビには、平安時代の和文特有のよみと思われるものと、それとはやや異なると思えるものとが見られるということ。
六 国語史上注意すべき語、語法が存するということなどである。

注12 平田俊春博士著『日本古典成立の研究』第三篇大鏡を中心として第一章大鏡諸本の系統と原型 五二一頁

34 赤松俊秀氏著『^{天理}圖書館 善本叢書 大鏡諸本集』千葉本解説 二五頁

5 「シャウシ」の「ウ」を落したか。他に「シユンさんク」
「准三宮」9ウ7・「トウクのたいふ」〔春宮大夫〕113ウ4・
「ニョハウ」〔女房〕69オ6などの例がある。色葉字類抄・伊呂波字類抄「シャウシ」

6 高山寺本和名抄・色葉字類抄など「宣耀殿」

7 『国語学大系（仮名遣一）』第六巻による。

8 「せうよう」〔仮名文字遣〕三 江の項にある。『国語学大系（仮名遣一）』第六巻二七頁上段。

9 源氏物語（源氏物語大成による。以下同）など、すべて「かんだちめ」温故知新書「カンタチメ」、黒本本・伊京集「カンダチヘ」、饅頭屋本節用集「カンダチベ」

10 源氏物語では「こきでん」「こうきでん」。色葉字類抄「コウキテン」、運歩色葉集「コウキテン」

11 源氏物語など「しげいさ」。高山寺本和名抄・黒川本色

葉字類抄「シクケイシヤ」、文明本節用集「シクケイシヤ」、運歩色葉集「シユクケイシヤ」

12 源氏物語など「ずきやう」。

13 枕草子（校本枕草子）など「じやうず」。運歩色葉集・文明本節用集「ジャウズ」、温故知新書「シヤウス」。千葉本大鏡には他に「しやうス」〔上手〕^{。。。。}51オ6がある。

14 色葉字類抄「カムヌシ」、前田本色葉字類抄・文明本節用集・黒本本・伊京集・饅頭屋本・易林本節用集・撮壤集・温故知新書・運歩色葉集・頓要集「カンヌシ」

15 色葉字類抄「キヤウヲウ」

16 色葉字類抄「シフキヤウ」、文明本節用集「シフギヤウ」易林本節用集「シユギヤウ」、運歩色葉集「シギヤウ」

17 色葉字類抄「セウ」文明本節用集「ゼウ」

18 日仏辞書「*Dgikōcha* チキヤウシヤ *ou dgikōja* ギキヤウジヤ」

19 文明本節用集・易林本節用集・運歩色葉集「ニヨウバウ」

20 黒川本色葉字類抄「ネンシヤク」

21 文明本節用集「バイゼン」

22 易林本節用集「ヒジヤウ」日仏辞書「*Fiō*」

23 玉上琢弥博士編『葉明抄河海抄』一八九頁

24 「平安時代の『御衣』の語について」豊田工業高等専門学校研究紀要第7号 一四頁。なお、本文中の使用例であるが、千葉本大鏡には、後世の語法の介入と思われる次の例がある。

。まことにしもあらさらめとけにことのさまもよとおほゆ

るましければにや

師尹 60ウ3

この問題の傍線の箇所、東松本・平松本・桂宮本（甲）・近衛家本など、「おほゆましけれ」とある。

25 八代集について調査すると、大鏡の例と同様「みまへ」

は神仏の御前という制約はあるが、次のごとき例が見える。神がきのみむろの山のさかきは神のみまへにしぎり

あひにけり ^{△古今集・神あそびのうた△}

576 さかきはにゆふしてかけてたか世にか神のみまへに ^{△拾遺集・神楽歌△}

はひそめけん

581 よも山の人のたからにするゆみを神のみまへにけふた ^{△拾遺集・神楽歌△}

てまつる ^{△拾遺集・神楽歌△}

1348 霊山の釈迦のみまへにちきりてし真如くちせすあひ見 ^{△拾遺集・哀傷△}

つる哉

1915 神葉の霜うちらはひかれずのみすめとぞ祈る神のみま ^{△新古今集・神祇歌△}

へに

（底本、古今集・新古今集は、日本古典文学大系本、拾遺集は、「拾遺和歌集の研究」）

26 八代集中に一例「おまへ」のかたち

1045 はるゝと御前の沖を見わたせば雲居に紛ふ海士の釣 ^{△千載集・雑歌上△}

舟

のごとく見えるが、「御前の沖」で個有名詞である。津国武庫郡御前沖という。（山岸徳平博士著『八代集全註下』四六〇頁。なお、底本は笠間叢書『千載和歌集』

27 国語学108 昭和五十一年十一月六日 国語学会研究発表会発表要旨 一〇九頁

28 注 27 一〇九・一一〇頁

29 30 31 『平安時代語新論』第三編本論 第三章文法 四八

三頁

なお、千葉本大鏡の時平伝に見える

香炉峯雪、撥^イ簾^イ看

15ウ1

の「ツイハテ」の語、孤例か。諸辞書にも登載されていないようである。

附 『年号読方考証稿』 鶏肋

我が国の年号のよみ方は、多く漢字を使用しているため、明確さを欠いている。山田孝雄博士は、これを憂え、「大体信頼し得べき書を掲げて」、「年号読方考証稿」(昭和二十五年六月十五日 宝文館刊)をまとめられた。博士の挙げられた資料は、凡そ次のごときものである。

① 中家実録 写本二十卷(統々群書類従)

② 番鍛冶次第附録年代記 写本一冊

③ 王代年代号略頌 写本一冊(無窮会蔵)

④ 年号読様 写本一冊(塩竈神社及無窮会蔵)

⑤ 年号訓点 南北朝合連 写本一冊(無窮会蔵)

⑥ 本朝通鑑 写本二百七十三卷(図書刊行会出版)

⑦ 童蒙必読 千号之巻 一冊

⑧ 御謚号年号読例 一冊

⑨ ロドリゲス著 日本大文典

⑩ ケムベル著 日本志

⑪ ドンケル、クルチウス 日本文典

⑫ ホフマン著 日本文典

これらは、^{注2}「大体『仁治』(筆者注、鎌倉期一二四〇〜一二四三)の末に書」かれた『中家実録』を除くと、すべて一七世紀以後、即ち、江戸・明治期のものであり、古代の年号のよみにいささか不安を感じる。

そこで、ここでは、千葉本大鏡に一四例ほど見える年号に存する声点及びよみを掲げて、『年号読方考証稿』を補いたいと思う。

山田孝雄博士の記述にならって示す。上段が千葉本大鏡であり、下段が『年号読方考証稿』である。

承和三年 6才3傍 承和上下興音 (中家実録)

そうわの御門 (大和物語)

承和十四 (年代号略頌)

承和十四 (番鍛冶次第)

承和 (本朝通鑑)

承和 (年号読様)

承和 (年号訓読)

承和 (童蒙必読)

承和 (御謚号年号読例)

834 Xōra (ロドリゲス)

^{注3}一景-Stor一景 (仁明) (ケムベル)

嘉祥様讀 (中家実録)

嘉祥 (祥)三 (年代号略頌)

嘉祥三 (喜ハ嘉ノ誤写デアラク) (番鍛冶次第)

嘉祥 (本朝通鑑)

嘉祥 (年号読様)

嘉祥 (年号訓読)

嘉祥 (童蒙必読)

嘉祥 (御謚号年号読例)

848 Caxó (ロドリゲス)

Kassoo(上ノ文ニアリ)(ケムベル)

齊衡三年 5ウ4傍

むかしさいかうのころとか(前田家本方丈記)

齊衡三年 (年代号略讀)

齊衡三 (番鍛冶次第)

齊衡 (本朝通鑑)

齊衡 (年号読例)

齊衡 (年号訓点)

齊衡 (童蒙必読)

齊衡 (御謚号年号読例)

854 Saicó (ロドリゲス)

Saije(上ノ文ニアリガ綴ニ誤ガアル)(ケンベル)

元慶元年 5ウ7

元慶元覽 (中家実録)

陽成八年是元慶 (年代号略讀)

元慶八 (番鍛冶次第)

元慶 (本朝通鑑)

元慶 (年号読例)

元慶 (年号訓読)

元慶 (童蒙必読)

元慶 (御謚号年号読例)

寛平 6ウ1

寛平 (年代号略讀)

寛平九 (番鍛冶次第)

寛平九 (年号読例)

寛平九 (年号訓読)

寛平 (童蒙必読)

寛平 (御謚号年号読例)

寛平 (ロドリゲス)

889 Quampeí (ロドリゲス)

昌泰三年 (ケムベル)

昌泰三年 (年代号略讀)

昌泰三 (番鍛冶次第)

昌泰 (本朝通鑑)

昌泰 (年号訓点)

昌泰 (童蒙必読)

昌泰 (御謚号年号読例)

昌泰 (ロドリゲス)

898 Xotai (ロドリゲス)

延長八年 (中家実録)

延長八 (年代号略讀)

延長 (番鍛冶次第)

延長 (本朝通鑑)

延長 (年号訓読)

延長 (童蒙必読)

延長 (御謚号年号読例)

一 昌 Genjwa (Genjwa ハ誤デアル)(陽成)(ケムベル)

寛平官ベイ平ノ字濁ル(中家実録)

寛平九 (年代号略讀)

寛平九 (番鍛冶次第)

寛平九 (年号読例)

寛平 (年号訓読)

寛平 (童蒙必読)

寛平 (御謚号年号読例)

889 Quampeí (ロドリゲス)

昌泰三年 (ケムベル)

昌泰三年 (年代号略讀)

昌泰三 (番鍛冶次第)

昌泰 (本朝通鑑)

昌泰 (年号訓点)

昌泰 (童蒙必読)

昌泰 (御謚号年号読例)

昌泰 (ロドリゲス)

898 Xotai (ロドリゲス)

延長八年 (中家実録)

延長八 (年代号略讀)

延長 (番鍛冶次第)

延長 (本朝通鑑)

延長 (年号訓読)

延長 (童蒙必読)

延長 (御謚号年号読例)

天慶四年^{テンキョウ} 27才7

923 Yenchō (ロドリゲス)
Jentsjo (ケムベル)

天慶^{テンキョウ}天堯

(中家実録)

天慶^{テンキョウ}九

(年代号略頌)

天慶^{テンキョウ}九

(番鍛冶次第)

天慶^{テンキョウ}九

(本朝通鑑)

天慶^{テンキョウ}九

(年号読様)

天慶^{テンキョウ}九

(年号訓点)

天慶^{テンキョウ}九

(童蒙必読)

天慶^{テンキョウ}九

(御謚号年号読例)

938 Tenguibō (ロドリゲス)
Tenkei (上文ニアル) (ケムベル)

天曆^{テンリキ}天略

(中家実録)

天曆^{テンリキ}十年

(年代号略頌)

天曆^{テンリキ}十

(番鍛冶次第)

天曆^{テンリキ}十

(本朝通鑑)

天曆^{テンリキ}十

(年号読様)

天曆^{テンリキ}十

(年号訓点)

天曆^{テンリキ}十

(童蒙必読)

天曆^{テンリキ}十

(御謚号年号読例)

947 Tenuicu (ロドリゲス)
Ten-^{テン}Tenuicu^{ニク} (村上) (ケムベル)

天元^{テンゲン}五年

(中家実録)

天元^{テンゲン}五年

(年代号略頌)

天元^{テンゲン}五年

(童蒙必読)

天元^{テンゲン}五年

(御謚号年号読例)

963 Yeiqua (qua^{クア}ナ^ナ脱シタ誤デア^ル)
Jequan (上文ニアル) (ケムベル)

永祚^{エイソク}元年

(中家実録)

永祚^{エイソク}元年

(年代号略頌)

永祚^{エイソク}元年

(童蒙必読)

天元^{テンゲン}五 (番鍛冶次第)

天元^{テンゲン}五

(本朝通鑑)

天元^{テンゲン}五

(年号読様)

天元^{テンゲン}五

(年号訓点)

天元^{テンゲン}五

(童蒙必読)

天元^{テンゲン}五

(御謚号年号読例)

978 Tengen (ロドリゲス)
Tengen (上文ニアル) (ケムベル)

永観^{エイカン}二年

(中家実録)

永観^{エイカン}二年

(年代号略頌)

永観^{エイカン}二年

(番鍛冶次第)

永観^{エイカン}二年

(本朝通鑑)

永観^{エイカン}二年

(年号読様)

永観^{エイカン}二年

(童蒙必読)

永観^{エイカン}二年

(御謚号年号読例)

983 Yeiqua (qua^{クア}ナ^ナ脱シタ誤デア^ル)
Jequan (上文ニアル) (ケムベル)

永祚^{エイソク}元年

(中家実録)

永祚^{エイソク}元年

(年代号略頌)

永祚^{エイソク}元年

(年号読様)

永祚^{エイソク}元年

(年号訓点)

永祚^{エイソク}元年

(童蒙必読)

永祚^{エイソク}元年

(御謚号年号読例)

永祚^{エイソク}元年

(中家実録)

永祚^{エイソク}元年

(年代号略頌)

永祚^{エイソク}元年

(年号読様)

永祚^{エイソク}元年

(年号訓点)

永祚^{エイソク}元年

(童蒙必読)

永祚^{エイソク} (御謚号年号読例)

989 Yeisō (ロドリゲス)

Jengen (上文ニアル、コレハ全ク誤デアル)

(ケルベル)

長徳元年^{チヤウトク} 50ウ8

長徳^{チヤウトク} (年代号略頌)

長徳四^{チヤウトク} (番鍛冶次第)

長徳^{チヤウトク} (本朝通鑑)

長徳^{チヤウトク} (童蒙必読)

長徳^{チヤウトク} (御謚号年号読例)

995 Chōtoku (ロドリゲス)

Tsio Toku (上文ニアル) (ケムベル)

寛仁元年^{カンニン} 45才5傍

寛仁四年^{カンニン} (年代号略頌)

寛仁元年^{カンニン} 57ウ1 (番鍛冶次第)

寛仁四^{カンニン}

寛仁^{カンニン} (本朝通鑑)

寛仁^{カンニン} (年号読様)

寛仁^{カンニン} (年号訓読)

寛仁^{カンニン} (童蒙必読)

寛仁^{カンニン} (御謚号年号読例)

1017 Quannin (ロドリゲス)

— 誤 — Quannin — (Quannin ニハ綴ノ誤ガアル)

(後一条) (ケムベル)

注1 『年号読方考証稿』緒言 三頁

2 注1 五頁

3 ケムベルの年号の読みの前後に「一略」とあるのは、筆者が前後の語句などを省略したことを示す。以下同じ。

(「語文」第四四輯 岸上慎二先生古稀記念論集

昭和五十三年三月)